

旧江戸川乱歩邸特別公開

——《池袋Ⅱ自由文化都市プロジェクト》——

落 合 教 幸

「戦後池袋 ヤミ市から自由文化都市へ」開催期間にあわせて、旧江戸川乱歩邸も特別公開をおこなった。

旧乱歩邸は、立教大学池袋キャンパス、六号館の北側に位置する。移築したものではなく、乱歩が暮らしていた住居を、隣接する立教大学が引き受け、二〇〇二年より管理することになったものである。

乱歩がこの家に転居してきたのは、一九三四（昭和九年、三十九歳の時）であった。雑誌『新青年』に連載していた小説「悪霊」に行き詰まり、読者へのおおびきを書いて中断したのはその少し前のことだった。

昭和九年に連載していた小説は「黒蜥蜴」「人間豹」の二作品である。

この時期、本格探偵小説の執筆に困難を感じ、乱歩の貢獻は評論・紹介へと向かった。これまでの探偵小説の歩みを紹介する『日本探偵小説傑作集』の編集や、評論集『鬼の言葉』に収録される探偵小説論の執筆などが、この時期の乱歩の成果だった。

昭和十一年には『少年倶楽部』に「怪人二十面相」を連載し、翌年には「少年探偵団」を連載する。少年ものを書き始めたのはここからである。

この時期の乱歩の心理は、昨年紹介された未発表原稿「独語」でも書かれている。大衆向けの読物雑誌や少年雑誌に執筆しながら、哲学や純文学へも関心を強く持っていた。昭和十年前後は、乱歩が「探偵小説第二の山」と称した

ように、乱歩の登場した大正末以来の、大きな盛り上がりを見せていた。だが、この山も社会情勢によって次第に衰退へと向かうことになる。

昭和十四年三月に、短篇集に収録予定だった、乱歩の昭和四年の短篇「芋虫」の削除が命じられる。時局は悪化して、探偵小説の発表は困難になっていった。

これ以降の乱歩は、「偉大なる夢」という防諜小説を試みたり、小松龍之介という別の筆名で少年物を書いたりもしたが、ほぼ休筆に近い状態となった。

昭和十六年には、それまでに集めた自分に関する資料を整理して、スクラップブック『貼雑年譜』の第一巻と第二巻を製作している。

戦時中から昭和二十年にかけての乱歩については『大衆文化』第十三号でやや詳しく述べた。

乱歩は探偵小説の執筆からは遠ざかり、町内会の活動にかかわっていく。防空群長として近隣の住人たちと訓練をおこなったことにはじまり、町会役員となって副会長の職をつとめるようになった。

昭和二十年四月の空襲で、池袋の大半は焦土となった。しかし、乱歩邸は幸運にも焼けずに残った。その後、乱歩

は夏に福島県保原へと疎開し、十一月にこの家に戻った。終戦間際には、作家としての活動をあきらめ、事務員として就職することまで考えたこともあった。しかし、敗戦によって状況が変わり、探偵小説が復興することを予感しつつ帰京したのである。

戦後の乱歩は、『宝石』をはじめ多くの雑誌にかかわり、探偵小説の振興に尽力する。雑誌の企画に協力し、評論・随筆などを次々と発表していった。

少年探偵のシリーズは昭和二十四年の『少年』に掲載された「青銅の魔人」で復活する。その後、『少年』での連載は昭和三十年代まで続く。これにより多くの読者が、探偵小説に親しむようになった。

今回の展示は、こういった戦中から戦後にかけての資料を中心としたものである。

昭和十四年に「芋虫」が検閲にかかる。『貼雑年譜』第二巻の最終ページには「愈々書けなくなった次第」とある。公的に刊行を禁じられたのはこの「芋虫」の件のみであったが、他の作品も増刷されなくなり、実質的には発禁と同様となってしまう。「実質上は私の旧作は殆ど全部抹殺されなければならぬ運命に立ちいたったわけである」と書か

れている。このページの複製を展示した。

戦中、乱歩は町内会の活動に協力する。回覧板をはじめ、各種の案内を自ら作成していた。近隣を描いた見取図では、防空壕や防火水槽、シャベルといった設備・用具などの位置が示されている。また、空襲後には、焼けた区域がわかる図も作成している。中庭の展示スペースには、乱歩の描いたこれらの図を展示した。

展示のすぐ脇にある、乱歩邸の庭の池は、空襲に備えて乱歩が実際に作った貯水池である。また南側にある築山には、当時は防空壕が掘られていた。

戦後になると、乱歩は探偵小説界を指導する立場で様々な活動をした。

乱歩周辺の人々が集まって「土曜会」がおこなわれ、それが発展して探偵作家クラブとなる。探偵小説の作家や愛好家が集まり、ここから多くの作家が育った。探偵作家クラブの結成は昭和二十二年だが、二十四年には「捕物作家クラブ」の結成にもかかわらず。クラブで作成した法被も展示した。

乱歩は編集者として雑誌『宝石』に力を注いだ。戦前に乱歩も活躍した『新青年』だけでなく、『宝石』関連資料も今回は多く展示した。

今回、乱歩関連の展示は東京芸術劇場ギャラリー2、ミステリー文学資料館、旧江戸川乱歩邸の三か所でおこなわれた。

旧江戸川乱歩邸の会期中来場者は、約一六〇〇名。特に会期後半には多くの人が訪れた。

(立教大学江戸川乱歩記念大衆文化研究センター学術調査員)



